

秩父とイチョウ

大友一夫

GINGO BILOBA

Dieses Baums Blatt , der von Osten Meinem Garten anvertraut ,
Gibt gebeimen Sinn zu kosten , Wie ' s den Wissenden erbaut ,

Ist es ein lebendig Wesen , Das sich in sich selbst getrennt ?
Sind es zwei , die sich erlesen , Da man sie als eines kennt ?

Solche Frage zu erwidern , Fand ich wohl den rechten Sinn ;
Fuhlst du nicht an meinen Liedern , Da ich eins und doppelt bin ?

Johann Wolfgang Goethe

上の詩は、1815 年、ゲーテ 66 歳のときに書かれたもので、『西東詩集』の中に収められています。一般に「イチョウ」又は「イチョウの葉」と翻訳されており、日本でもなじみ深い詩の一つです。

わたしなりに意識するとこうなります。

ちちの葉

^{ひんがし}東の 遥けき地より わが庭に 来たりし木の葉
^{まれもの}稀者に あやしき想ひ 抱かしむ
そはもと^{ひと}一葉 二筋に 裂くものなりや
はた^{ふたは}二葉 睦み一つと なりぬるや 思い尽くして はたと知る
君も気づかむ わが歌に 「心一つに 身を同じうす」

ご覧のとおり、これは相聞歌の一つであり、35 歳も年若いマリアンネに捧げたもので、その際、二枚のイチョウの葉を添えて贈ったとも言われています。この詩の前後に書かれた夥しい恋歌から察するに、彼女にぞっこん惚れ込んでいたことは明らかです。もともと恋多き人でしたが、老境にありながら、まだまだ残っていた恋心を育み、なおかつ吐露しています。この年ゲーテは、学芸などを統括する国務大臣にまで昇り詰めているのです。ただ本旨と掛け離れそうですので、マリアンネとの関係は割愛させていただきます。

ゲーテは、既に少年時代から旧約聖書を通じて東洋に憧憬を抱いていました。一人 1814 年、14 世紀のペルシャの抒情詩人ハーフィスの詩集に出会ってから、いよいよ東洋への蘊蓄を傾けることになります。その集大成がこの 『西東詩集』 なのです。イチョウも当時は、東洋の珍しいエキゾチックな植物でした。植物学者でもあったゲーテは、その葉の形態に先ず興味を抱いたのでしょう。併せてその葉に思いを託し、二人が一心同体であることを強調したかったのかも知れません。

生きている化石



写真 1 Ginkgo diditata
中生代白亜紀 岐阜県荘川村

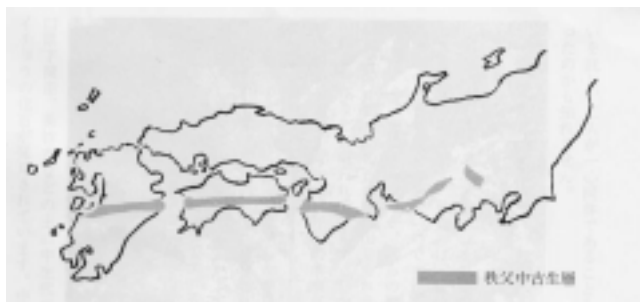


写真 2 Ginkgo sibirica
中生代ジュラ期 富山県朝日町

外国人が日本に来てイチョウを見ると、目を見張って感嘆するそうです。秋ならば、黄色に色づいたイチョウ並木は確かに美しいのですが、生きている化石が、今眼前にあることが、彼らの驚きでもあるのです。イチョウの古木がたくさん見られる所は、現在、中国や日本などに限られています。しかし殆どが植樹されたもので、野生種は中国の湖南省にわずかに見られる程度だそうです。

イチョウが初めて地上に登場したのは、古生代末期と言われています。約二億五千万年前です。シダ植物はそれより以前から存在していますが、裸子植物ではソテツと並んで古い植物です。そして中生代ジュラ紀（約一億五千万年前）がその最盛期で、日本、中国はもとより、シベリア、ヨーロッパ、北アメリカにも広く分布していました。現在、北海道の石炭層、岩手県久慈市、富山県下新川郡、石川県能美郡、石川郡、長野県北安曇郡、岐阜県大野郡、山口県下関市、美祢市などの主に中生代の地層から、イチョウの化石が発見されています。中生代といえば恐竜が闊歩していた時代です。イチョウの大森林の中

で、草食恐竜が銀杏を食べていたことを想像すると、胸がわくわくするではありませんか。



図：1 秩父中古生層

当初のイチョウは今のよう二股ではなく、分葉の程度が様々でした。（写真 1、写真 2）。なお、オレゴン州の新生代漸新世（約三千万年前）の地層から発見されたイチョウの葉が、現生種とほぼ同形のものだと言われています。秩父にも当然あってしかるべきですが、寡聞にしてその報告を聞いていません。と申しますの

は、日本列島の骨格をなす地層は、「秩父中、古生層」（図 1）と呼ばれており、この層は、古生代オルドビス紀から中生代ジュラ紀末期にわたるものです。秩父山地には本層が広く分布したため、当初「秩父古生層」と命名されました。日本の古生層の研究は、ここ

から始まったのです。

イチョウ目はトリコピチス科とイチョウ科に分類されますが、前者は古生代ペルム紀にのみ存在し、絶滅した科で、後者の中に、現在生息しているイチョウが含まれています。その中でも、イチョウ属が新生代まで生き残り、さらに現在は、一属一種のみが生存しています。初めてイチョウのことを「生きている化石」と表現したのは進化論で有名なイギリスのダーウィンでした。

ははその杜のちちの木

イチョウ科イチョウ属の *Ginkgo Biloba*, Linne. がイチョウの正式学名で、1771 年にリンネが命名しました。Biloba は、「二浅裂した」の意味です。属名の *Ginkgo* は銀杏（ぎんきょう）由来の名称ですが、これには経緯があります。

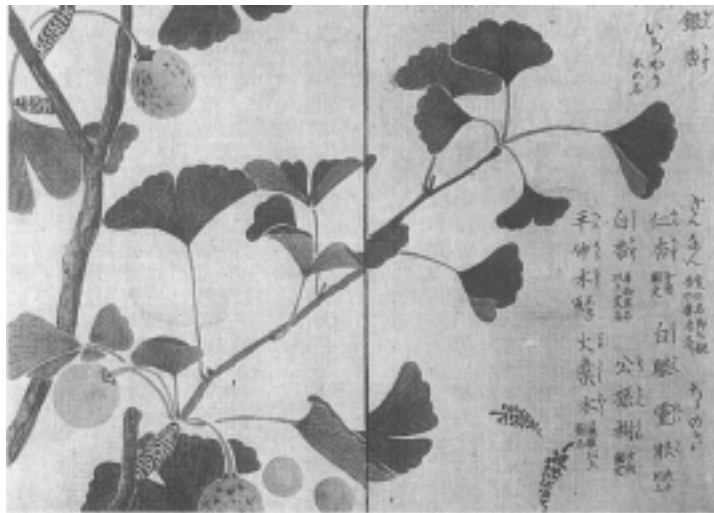
ヨーロッパに初めてイチョウを紹介したのは、ドイツ人のケンペルです、元禄三年（1690 年）彼はオランダ商館付の医官として来日しました。日本の植物にも興味を示し、中村^{てきさい}陽^{きんちゆうずい}齊の『訓蒙図彙』に記載された銀杏を Ginkyo や、Ginkjo でなく、Ginkgo と綴ったため、リンネもそのまま命名してしまったと言われています。銀杏を紹介したケンペルの著『異国の魅力』（1712 年）がラテン語で書かれたためでしょうか。しかし最近の研究では、ケンペルは誤って記述したのではなく、彼の地方では、Ginkgo と書いて「ぎんきょう」と発音することが分かりました。ケンペルはイチョウの木を故国に持ち帰り、各所で植樹したと伝えられています。こうして東洋の奇木がゲーテのもとにも届くのです。

岩崎灌園が二十余年の歳月を費やして完成させた『本草図譜』（1828 年）にも「銀杏」が記載されています（図 2）。

ここでも、「ぎんきやう」と振り仮名されており、別に、「仁杏」「白眼」「靈眼」「白杏」「公孫樹」「平仲木」「火索木」「いちやう」「ぎんなん」「ちちのき」の名称が綴られています。「公孫樹」は祖父が植えて、孫がその実を食べるという

時間の長さから付けられた名称です。イチョウの語源は「一

葉（いちよう）」であろうとする貝原



図：2 『本草図譜』銀杏

益軒の説が広く流布していました。しかし、中国ではイチョウの葉が鴨の脚に似ていることから、銀杏のことを鴨脚子と表現していました。その鴨脚の宋音が「ヤチャオ」だったことから、鎌倉時代、中国で学んだ渡来僧が「イチョウ」と言い伝えたのでであろうと推定

されています。インテリは常に外来の文化には弱いものです。日本では既に「ちちのき」の名称が存在していました。

「ちちのき」の名の由来は、イチヨウの木に、乳房のような癌（気根）ができるためです（写真3）。長さ2m、直径30cmぐらいになることもあります。

形は根のようでも、性質は枝に近く、地に達すれば枝ができ、これを地に挿せば先端から新芽が出ると言われています。

『万葉集』には「ちちの実」の記載が二カ所に認められます。

「ちちの実の 父の命 ^{みこと} 柞葉の ^{ははそば} 母の命 おほろかに 心尽くして 思ふらむ…」

「柞葉の 母の命は み裳の裾 摘み上げ掻き撫でちちの実の 父の命は 拷づのの

白ひげの上ゆ涙重り 嘆きのたばく…」

「ちちの実の」は、いずれも「父」の枕詞として登場します。同様に「柞葉の」は「母」の枕詞です。ともに敬意を込めて用いられています。母の枕詞には、他に「たらちねの」がありますが、「ははそばの」は、単に韻を踏んでいるだけでなく、「母のおそばで孝を尽くしたい私」の意が含まれているような気がします。同様に「ちちの実の」には「父の恥ずかしくない子としての私」を意識しているようにも思えるのです。



写真3 秩父宮勢津子妃殿下
お手植えの銀杏の気根

柞は、ブナ科の落葉灌木であるナラやクヌギの総称です。さて、「ちちの実」がどんな植物の実を指すのか、いまだ定説がありません。銀杏の実の他に、松の実、栃の実、イヌビワの実などの説があります。イヌビワの実は乳首に似ていることから想定されましたが、その木は、父がイメージする雄々しさとは掛け離れています。わたしには賀茂真淵の説が一番腑に落ちます。彼の著した『冠辭考』に、「凡そ古へ人の歌には、さるかたくにに在りて世に知られぬ者を強てよむはなかりしかば、銀杏こそ常にあるからにこそよみけめ。さていてふといふは、我が國の語ともなければ、此の木をちちの木と云ひ、その實をちちの實といはんぞ古き語なるべき。皇御國の草木の名は、田舎人の心もなくいひならへるを、古き書にむかへて見るべきなり。」とあります。

柞の中で雄々しくそそり立つイチヨウの光景こそ、当時どこにでも見られた古里のイメージなのでしょう。昔、秩父神社周辺の森は、柞の杜と呼ばれていました。神社の境内には、いまだにイチヨウの巨木が何本か屹立しています。ははその杜のちちの木なのです。

水吹きイチヨウ

以前能登を旅行したとき、氷見の上日寺の大銀杏に出会いました。しめ縄が引き渡された樹高 36m、幹回り 13mの大木です（写真 4）。秋には千^リにも及ぶ実を結ぶと言われています。大小無数の気根が垂れ下がり、その先端が削られているのは、乳の出ない母親がそれを煎じて服用するためだそうです。このような民間信仰は、川崎市影向寺など、日本各地に認められます。それらは乳イチョウとか垂乳根イチョウ、或いは子育てイチョウと土地の人に呼ばれ、親しまれています。

上日寺のイチョウは、天武朝の 681 年に、寺の創建と同時に植えられたもので、樹齡千三百年を越えています。青森県北金ヶ沢の銀杏、岩手県長泉寺の大銀杏、宮城県苦竹の大銀杏、秋田県川口の銀杏、千葉県葛飾八幡神社の千本銀杏、神奈川県鶴岡八幡宮の銀杏、岐阜県国分寺の銀杏、加茂神社の銀杏、広島県筒賀の銀杏、愛媛県三島神社の乳出の大銀杏、高知県平石の乳銀杏、長崎



写真：4 上日寺の大銀杏

県対馬の琴の銀杏、大分県高塚地蔵尊の乳銀杏など樹齡千年を越えるイチョウは、日本全土に渡っているのです。中には幹回り 16mにも及ぶものもあります。中国でも樹齡千五百年程度のもは認めるそうですが、さすがに二千年を超すものは無さそうです。千五百年程度が寿命なのかも知れませんが、先程の高塚地蔵尊の縁起に、聖武天皇の時代（724 年～748 年）、行基が公孫樹に靈現を表し、地蔵尊を彫刻して安置したとあります。ということは、当時既に大銀杏が存在していたことになり、現在のは二代目ということになりましょう。聖地の場合には、きっと植え継がれて来たのだと思います。このように日本で神社や寺院にイチョウが多

いのは、霊木としての雰囲気漂っているためなのかも知れません。人類誕生のはるか以前から生き続けている大木に、古代人が感応しない筈がありません。その他イチョウの葉は保水力が大きいので、火災に強いと言われています。イチョウの葉の七割は水分です（ちなみに樺は五割）。俗に「水吹きイチョウ」と言われるのは、熱を加えると水蒸気が発生するためです。長年の経験から、社殿や仏閣を守るにはイチョウが最適であることも知っていたのです。京都本願寺が、安政の大火から免れたのもイチョウのお陰だと伝えられています。関東大震災でも、火災を免れた地域には、イチョウが生えていたところが多かったといわれています。

知恵の葉

イチョウには、その他様々な特徴があります。この木は雌雄異種です。四、五月頃雄花の花粉が飛び散り、風に乗って遠方まで達し、雌花の胚珠の口から内部に入り受粉します。九月初旬には、その中に二個の精子ができ、卵珠に受精することが分かっています。種子

植物に精子が存在することは珍しく、この過程は、明治二十九年九月九日、帝大理科大（現在の東大理学部）助手であった平瀬作五郎氏によって発見されました。昨年九月には百周年を記念して、東京で記念フォーラムやシンポジウムが開かれました。小石川植物園には、発見当時のイチョウが、記念樹として今でも聳えたっています。その後、ソテツの精子も、池野成一郎氏によって見いだされています。

イチョウは、中国最古の本草書『神農本草経』には、記載されていません。明代の李時珍の著した『本草綱目』によれば、イチョウは元、江南（今の湖南省の辺り。先の湘南省も揚子江以南）に生じ、明代初期に初めて入貢したとあります。入貢とは、外国人が入朝して、貢（みつ）ぎ奉ることを言います。このときに初めて銀杏の名が登場したとあります。地上に存在するものは何でも薬物として使用した中国にしては、あまりにも迂闊です。やはりそれほど一般的な植物ではなかったのでしょう。現在漢方でも滅多に使うことはありません。時珍は、銀杏の実の効能のみに言及し、「熟して食べば肺を温め、気を益し、喘嗽を定め、小便せ縮し、白濁を止める。生で食べば、痰を降ろし、毒を消し、蟲を殺す」と述べています。その他、これをかみ砕いて、皮膚病に塗布するともあります。

イチョウ、特にその葉の効能が注目されたのは、現代ヨーロッパにおいてです。イチョウの青葉には十数種類のフラボノイドが含まれており、その後ギンコライドと呼ばれるイチョウ特有のテルペンも見いだされています。ギンコライドはコロンビア大学の中西教授らによって発見されました。それらの総合作用としての生物学的活性が、年々明らかにされつつあります。

始めこれに注目したのは西ドイツの生薬メーカーでした。イチョウの強い生命力に着目したのでしょう。老いてなお盛んだった祖国の詩人ゲーテも関心を抱いていたではありませんか。このメーカーは特殊な抽出技術でフラボノイドの引き出しに成功したのです。当初フラボノイドが末梢血管を拡張したり、血液の粘度を下げる働きから、老人の脳血管障害や動脈硬化症に使用されていました。その後ギンコライドは、血小板活性化因子（PAF）を制御する働きがあることが分かり、アレルギーや免疫疾患にも応用されるようになりました。イギリスの医学雑誌『ランシエツト』などにも、ヨーロッパ中の学者から次々と論文が寄せられており、最近イチョウの葉のフラボノイドには活性酸素を消す働きもあることが分かり、注目されています。具体的症状としては、めまい、耳鳴り、頭痛、知覚不全、記憶喪失などの改善が認められ、老人性痴呆にも積極的に使用されているのです。平成五年十月一日の『日本医師会雑誌』でも、五島雄一郎先生が、抗痴呆薬としてイチョウ葉エキスを紹介しています。今やフランス、ドイツ、スイスなどでは、老化防止、成人病予防の生薬として人気が高まり、全医薬品の売り上げの常に一、二位を占めるという盛況ぶりです。

それでは、この薬の原材料であるイチョウの葉はどこから手に入れているのでしょうか？ その主な産出国は日本なのです。北は山形から南は熊本まで、約千戸の農家でイチョウが輸出用に栽培されています。中には、桑畑をイチョウ畑に切り替えた農家もありま

す。円高だったにもかかわらず、日本産のものが珍重された理由は、一つにはヨーロッパでは生育しにくいためだと思います。しかも、中国産、韓国産に比べ、土壌の関係で日本のイチヨウには二倍近くのフラボノイドが含まれているそうです。もう一つの理由は、世界最長寿国である日本のイチヨウに、妖しい魅力を感じたためかも知れません。

これ程魅力的なイチヨウの葉が、現在（平成9年3月）日本では医薬品として一般化されていないことを知ったら、ヨーロッパ人は唖然とするのではないのでしょうか。

源流としての秩父

埼玉と山梨を結ぶ雁坂峠のトンネルが開通し、国道140号線の両県に跨る運行は、整備を待つのみとなりました。熊谷方面から秩父市街に入ると、この国道沿いに長いイチヨウ並木が続きます。秩父在住のものにとってはそれほど珍しい光景ではありません。随所にイチヨウの木を目にし、あまりにも馴染み深いものになっています。

日本には、イチヨウの家紋が120以上認められ、108の自治体で、イチヨウの紋が使われていますが、秩父では、古くからの幼稚園の園章や小、中、高校の校章に、イチヨウが用いられています。例えば秩父郡市内にある五つの高校の内、三つの高校の校章が、イチヨウの葉を図案化したものです。従って就学過程において、一度はイチヨウのマークを身につけた秩父出身者は多いと思います。ある大学の医学部教授は、秩父第一小学校、秩父第一中学校、浦和高校、東京大学と、全部イチヨウの校章で通されました。秩父幼稚園に通っていたらパーフェクトだったはず（図3）。ちなみに先生が通っていたころの秩父第一小学校には、校門を入ると左右に、雄株雌株の立派なイチヨウが植えられていたそうです。

秩父から東京へ、そして日本全国へ。それはちょうど、秩父を源流とした荒川が、清々たる流れとなつて東京湾から海に注ぐ様に似ています。

桓武天皇の七代後の子孫平将常は、武蔵権守に任ぜられ、秩父郡中村郷に居し、秩父氏を名乗りました。この秩父氏の子孫が江戸氏なのです。

その他畠山氏、河越氏、豊島氏、渋谷氏、葛西氏、河崎氏、稲毛氏、小山

田氏、榛名氏、高山氏など、皆秩父氏の一族なのです。関東一円で勇名を馳せた武士団でした。まだ未開であった東京に比べれば、秩父が武蔵国の中でも重要な拠点であったことが分かります。

さらに遡れば、秩父から日本全国に行き渡ったものがあります。秩父で採れた銅です。和銅元年（708年）、武蔵国秩父郡の和銅（にぎあかがね）が献上されました。これが和銅



図：3

開珎となる訳ですが、その慶賀に伴い、冠位が上げられたり、恩赦が施されました。百歳以上のものには勅三斛、九十以上には二斛、八十以上には一斛が授与され、その年の武蔵国の庸、秩父郡の調が免じられたほど、画期的な出来事でした。秩父における優れた地質調査、精鋼技術はもとより、管理体制、交通も行き届いていなければこれだけのことはなし得ません。人もいよいよ集まり、賑わいを見せたことでしょう。

武甲山の石灰岩がセメントとなつて全国に流通した以上に、国を挙げての壮挙だったのです。

その武甲山は、景行天皇の時代（紀元 71～130 年）には、「チチブ山」と呼ばれていたようです。古伝『秀真伝』^{ホツマツタエ}によれば、景行天皇の子であり、次期天皇と目された日本武尊^{ヤマトタケノミコト}（小碓御子、花彦尊とも称した）は吾妻巡錫の折り、雁坂峠を越えて秩父にも立ち寄っています。「花彦尊は^{はなひこ} わが幸御魂^{さきみたま} 知ろし召し^{かゝあひ} 川合の野に 大宮お 建てて祭らす^{ひかわかみ} 氷川神^{いくさうつわ} 戦器^{いくさうつわ} は チチブ山」
と記載があります。

日本武尊は、自分が素戔鳴尊の生まれ変わりであることを悟られ、川合の野には氷川神（素戔鳴尊）を祭り、チチブ山には武具を奉納したというのです。

川合の野とは、氷川神社のある埼玉の大宮のことなのかも知れません。しかし、秩父にも素戔鳴尊を祭つた社はいくつかあり、皆野町金沢の萩神社もその一つです。日本武尊が当地を訪れたとき、萩がたくさん咲いていたので、

「あな美^{うま}し萩よ萩」

と感嘆し、素戔鳴尊を祭られたと言われています。『秀真伝』によれば素戔鳴尊も日本武尊も和歌に秀でた方であったようです。

チチブ山に武具を納めた伝承は『古事記』や『日本書紀』には記載がありませんが、秩父では古くから言い伝えられています。

日本武尊に因んだ神社や伝承も数多くあり、場合によっては秩父に長く滞在した可能性もあります。その由緒ある武甲山は、以前は日本百名山に挙げられていましたが、今や石灰岩の採掘によって、昔の山容は見る影もなく、辛うじて二百名山に取り上げられています。武甲山は、武光山と称されたこともありましたが、いづれ、**武尊の鎧甲**、**武尊の栄光**を偲んで付けられた名前だと思います。志半ばで倒れた日本武尊は、歴史上最大の英雄でした。その痛ましさを考えると、秩父人に尊崇された武甲山と、日本国民に嘱望された日本武尊が、妙にだぶついて見えるのです（写真 5）。



写真:5 羊山公園から見た武甲山

ちちぶひこのみこと

知知夫彦命とイチョウ

菖事紀国造本紀に、「知知夫國造、^{みづがき}瑞籬朝御世、^{やごころおもいかねのみこと}八意思兼命 十世孫知知夫彦命、定賜國造」とあります。崇神朝（紀元前 97 年～紀元前 30 年）に、思兼命の十代目の子孫、知知夫彦命が国造に任命されたということです。知知夫彦命は、思兼命、天御中主命、秩父宮雍仁親王とともに秩父神社の主祭神として祭られています。なお本殿の左右には、豊受大神を祭る豊受社と天照大神を祭る神明社も摂社として配置されています。

知知夫彦命の御事績は詳らかではありません。しかし我が国では、一般の人とは違った特別な能力を持つものは皆、神様として祭られました。即ち、威容を誇るもの、仁徳の広大なもの、生きるうえで必要不可欠なもの、庶民を救ったり、幸運をもたらすもの、怨念や意志により災いを為すものなどです。それは人や動物だけでなく、自然界に存在するすべてのものが対象となります。知知夫彦命はきっと何かの偉業により、秩父の庶民に深く愛され崇敬された人なのでしょう。

秩父は知知夫彦命の知知夫から取ったという説がありますが、これでは「ちちぶ」の本来の意味を知る手だてとはなりません。「ちちぶ」の語源を巡っては、古来様々な憶測が提唱されて来ました。いくつか挙げてみましょう。

アイヌ語説：チ・チェブ（我らの・食物のあるところ） チセブ（熊の穴のあるところ） チシブ（険路のあるところ） チチャブ（河流）由来とする諸説。北海道の雪秩父、秩父別の地名はチップ（ヒメマス）の当て字と思われます。

魚名説：鯪の別名を魚庸（ちちかぶり） 知知夫（ちちふ）ともいいます。

山岳説：山の脊を昔チップと呼びました。 千千峰由来とする説もあります。

鍾乳石説：石灰岩の多い秩父には橋立鍾乳洞の他に、最近、雁坂峠近くに巨大な鍾乳洞が発見されました。鍾乳石の滴る様を乳（チチ）に見立てています。

千茅生説：沢山の茅が生えていたことから。

乳生説：先に述べたチチの木、即ちイチョウの木が生い茂っていたことから、乳生と称しました。賀茂真淵もこの説を採っています。

以上が秩父の語源に関する主要な諸説ですが、わたしは、賀茂真淵の説を採りたいと思います。この反論としては、イチョウの木は、仏教伝来とともに日本に移植されたもので、それこそ知知夫彦命の時代には存在しなかったはずだと言うのです。しかしわたしは、先に延べて来たように、イチョウの生存しやすい環境は既に太古から日本にあったと思われ、聖地などでは連綿と植え継がれて来たのではないかと想像するのです。敢えて勝手な憶測を交えるなら、石灰岩が多く、しかも日本の風土の中ではイチョウが生育しやすいのかも知れません。イチョウの化石が発見された土地と鍾乳洞の関係を見るならば、久慈市と龍泉洞、美祢市と秋芳洞などが挙げられます。鍾乳石（写真 6）とイチョウの気根とがあまりにもよく似ているため、わたしには共通の波動があるように思えてならないのです。ともにチチ（乳）と呼ばれて来ました。



写真 6 秩父橋立鍾乳洞の鍾乳石

チチが生い茂る所、乳生（秩父）。古来、植物が生い茂ったり、鉱物が産出する所を「ふ」「う」「ぶ」「お」と表現して来ました。関東地方には他に、桐生（きりゅう、群馬）葛生（くずう、栃木）栗生（くりゅう、栃木）栗生（あおう、茨城）萩生（はぎゅう、群馬）菅生（すごう、千葉）菅生（すがお、茨城）羽生（はにゅう 埴生、埼玉）大麻生（おおあそう、埼玉）などの地名があります。

「生」を「ぶ」と発音する所も全国にはあります。麻生（あさぶ、札幌）筋生（あざぶ、愛知）信夫（しのぶ 篠生、福島）埴生（はぶ、山口）などです。

『延喜式』に、秩父郡二座として、秩父神社と椋神社が挙げられていますが、秩父の振り仮名として「チチブ」ではなく、「チチフ」と書き記されています。

チチフは漢字到来とともに、当初、知知夫と当て字されたようです。しかしその後『延喜式民部式』に、「凡諸国部内郡里等名竝用二字必取嘉名」とあるように、地名は二字にするようにとの勅命で、「秩父」に改名されたようなのです。

秩父の子供達はよく悪ふざけの中で、左右の乳を指さした後、おならをする仕草をして「ち・ち・ぶー」と発声して見せます。彼らはある意味で正しい伝承を行っていたのです。「ちちぶ」が「乳生」では、余りに生々しく、何となくみっともないと感じたのでしょうか。知恵の神様思兼命にあやかった訳でもないのですが、初め、「知知夫」という字を当て、後、「秩父」という馬鹿にされない名称に落ち着いたのだと思います。

今日本では、中国や台湾のように、外来語を洒落た漢字に置き換える工夫もなく、カタカナ文字がやたらに氾濫しています。華やかな外来文化に対する憧憬は、今も昔も変わりありませんが、古代はまだ、当て字の工夫が行き届いておりました。また、「嘉き名」にするために、歴史の重みを簡単に捨て去るあたりにも、日本人、特に為政者の気質を垣間見る思いがします。秩父の「蓑山」も、いつの間にか「美の山」に改名されてしまいました。

その美の山の展望が素晴らしい高台（皆野町国神）に、知知夫彦命の墓地があります。これを国神塚と



写真：7 国神塚

称します。何と、小さな祠に覆いかぶさるように、巨大なイチョウの木が聳えたっているではありませんか（写真7）。平成三年の環境庁の調査によると、県の巨木の中では、九番目の大きさだそうです。さらに少し下がった所にも大イチョウがあり（写真8）、ここには、知知夫彦命の奥様である知知夫姫命の祠があります。近在の人に尋ねると、双方のイチョウとも、雄株だとのこと。次に植え替えるときには、姫命の株は是非雌株にしてもらいたいと願っています。雌株のイチョウは、少し離れたところの金崎神社の入り口にありました。晩秋訪れたときには、車に踏み付けられた銀杏の実が、独特の匂いを放っていました。この神社は、知知夫彦命と知知夫姫命を祭っており、維新前は、野栗三社権現と呼ばれていたようです。秩父国造にゆかりの深い古い社であることから、平安時代の安元二年に奉納された鏡も残っています。昭和五十三年には、さらに町中に新しい金崎神社が建立され、神々はこちらに遷座されたため、元の神社はうらぶれて物寂しい気配が漂っています。このまま朽ち果てるのでしょうか。

しかし、国神塚の方は、実に明るく、そのイチョウを眺めると、いまだに知知夫彦命の威光が息づいているように思えます。やはり、知知夫彦命の名にちなんで、ちちの木が植えられたのでしょうか。秩父とイチョウは極めて深い因縁で結ばれているのです。

少子化と高齢化が進み、企業は次々と撤退し、寂れ行く気配のある秩父に、再活性化を図るための方策を求めるのなら、まずは歴史の再認識から始めなければいけません。その一つのよすがになればと思い、こんな駄文をしたためました。

牽強付会と謗られるかも知れませんが、しかし、「ちちぶ」の名の響きに幻惑され、イチョウの測り知れぬ魅惑に感応した人間の、極めて個人的な手応えを書き留めてみました。ご一笑ください。

終わりに、資料や情報の提供をいただいた方々に感謝申し上げます。



写真：8 知知夫姫命の示司と銀杏 左は知知夫彦命の国神塚

参考文献

- 『ゲーテ西東詩集 - 翻訳と注釈』 平井俊夫訳 郁文社
- 『ドイツの詩を読む』 野村修 白水社
- 『若いゲーテ評伝』 高橋健二 河出書房新社
- 『化石のたのしみ』 若一光司 河出書房新社
- 『化石探検』 福田芳生 同文書院
- 『化石の世界』 井尻正二・秋山雅彦編著 大月書店
- 『Field Selection 化石』 北隆館
- 『花の歳時記』 居初庫太 淡交社
- 『世界の植物 9』 朝日新聞社
- 『木の手帳』 小学館
- 『木の名の由来』 深津正・小林義雄 東書選書
- 『万葉集』 伊藤博校注 角川書店
- 『万葉集事典』 有精堂
- 『万葉集の植物』 青野正美解説 偕成社
- 『埼玉県秩父郡誌』 臨川書店
- 『秩父学入門』 清水武甲編 さきたま出版会
- 『巨樹を見に行く』 梅原猛ほか 講談社
- 『巨樹名木巡り』 牧野和春編著 牧野出版
- 『国譯本草綱目』 春陽堂
- 『銀杏とサメと賢い食事』 新潮社
- 『毎日新聞』 昭和五十四年十月十二日
- 『静岡新聞』 平成二年四月九日
- 『朝日新聞』 平成八年八月二十三日
- 『日本医師会雑誌』 平成五年十月一日
- 『訓読続日本紀』 今泉忠義訳 臨川書店
- 『完訳秀真伝』 鳥居礼 八幡書店
- 『秩父百社』 埼玉県神社庁秩父都市支部
- 『日本地名ルーツ事典』 創拓社